子どもの発達支援の基本
学校ACE®研究

公益社団法人 子どもの発達科学研究所
担当:主席研究員　和久田　学

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します

1

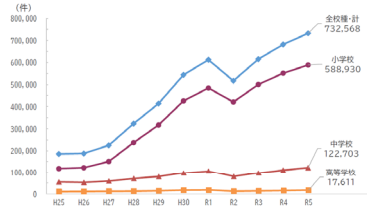
令和5年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果より

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します

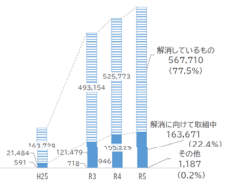
2

いじめの状況について

いじめの認知件数の推移



いじめの解消状況の推移(各年度末時点)



年度	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5
小学校	118,748	122,734	151,692	237,256	317,121	425,844	484,545	420,897	506,562	551,944	588,930
	17.8	18.6	23.2	36.5	49.1	66.0	75.8	66.5	79.9	89.1	96.5
中学校	55,248	52,971	59,502	71,309	80,424	97,704	106,524	80,877	97,937	111,404	122,703
	15.6	15.0	17.1	20.8	24.0	29.8	32.8	24.9	30.0	34.3	38.1
高等学校	11,039	11,404	12,664	12,874	14,789	17,709	18,352	13,126	14,157	15,568	17,611
	3.1	3.2	3.6	3.7	4.3	5.2	5.4	4.0	4.4	4.9	5.5
特別支援学校	760	963	1,274	1,704	2,044	2,670	3,075	2,263	2,695	3,032	3,324
	5.9	7.3	9.4	12.4	14.5	19.0	21.7	15.9	18.4	20.7	22.3
計	185,803	188,072	225,132	323,143	414,378	543,933	612,496	517,163	615,351	681,948	732,568
	13.4	13.7	16.5	23.8	30.9	40.9	46.5	39.7	47.7	53.3	57.9

※ 上段は認知件数、下段は1,000人当たりの認知件数

- 小・中・高等学校及び特別支援学校におけるいじめの認知件数は732,568件(前年度681,948件)であり、前年度に比べ50,620件(7.4%)増加している。
- 児童生徒1,000人当たりの認知件数は57.9件(前年度53.3件)である。
- 年度末時点でのいじめの状況について、解消しているものは567,710件(77.5%)であった。

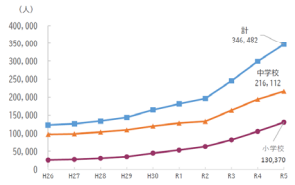
© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します

3

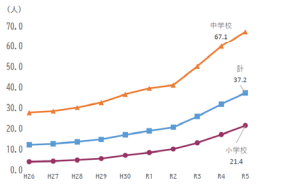
小中学校における不登校の状況について

- 小・中学校における長期欠席者のうち、不登校児童生徒数は346,482人(前年度299,048人)であり、児童生徒1,000人当たりの不登校児童生徒数は37.2人(前年度31.7人)。
- 不登校児童生徒数は11年連続で増加し、過去最多となっている。

不登校児童生徒数の推移



不登校児童生徒数の推移 (1,000人当たり不登校児童生徒数)



不登校児童生徒数(上段)と1,000人当たりの不登校児童生徒数(下段)

	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5
小学校	25,864	27,583	30,448	35,032	44,841	53,350	63,350	81,498	105,112	130,370
	3.9	4.2	4.7	5.4	7.0	8.3	10.0	13.0	17.0	21.4
中学校	97,033	98,408	103,235	108,999	119,687	127,922	132,777	163,442	193,936	216,112
	27.6	28.3	30.1	32.5	36.5	39.4	40.9	50.0	59.8	67.1
計	122,897	125,991	133,683	144,031	164,528	181,272	196,127	244,940	299,048	346,482
	12.1	12.6	13.5	14.7	16.9	18.8	20.5	25.7	31.7	37.2

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します

4

無断転載、複製、配布を禁ずる。

令和5年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果より

自殺の状況について

● 小・中・高等学校から報告のあった自殺した児童生徒数は397人（前年度411人）である。

	小学校	中学校	高等学校	合計
R３年度	8	109	251	368
R４年度	19	123	269	411
R５年度	11	126	260	397

※ 昭和51年までは公立中・高等学校を調査。昭和52年からは公立小学校、平成18年度からは国私立学校、平成25年度からは高等学校通信制課程も調査。
※ 昭和49年から62年までは年間の数、昭和63年以降は年度間の数である。
※ 学校が把握し、計上したもの。

自殺した児童生徒が置かれていた状況（複数回答可）（人）

	小学校	中学校	高等学校	合計
家庭不和	3	25	37	65
進路問題	1	14	23	38
父母等の叱責	2	22	18	42
友人関係（いじめを除く）	0	16	15	31
精神障害	0	14	47	61
学業等不振	0	11	9	20
うつ症	0	8	17	25
病弱等による症状	0	4	5	9
恋愛関係での悩み	0	6	14	20
いじめの問題	0	5	2	7
教職員との関係での悩み（体罰、不適切指導を除く）	0	1	2	3
教職員による体罰、不適切指導	0	0	1	1
不明	7	58	121	186
その他	1	13	13	27

令和5年度の警察庁の統計数値との比較（人）

	警察庁調査	文部科学省調査	差
小学校	13	11	2
中学校	159	126	33
高等学校	353	260	93
合　計	525	397	128

※警察庁調査、文部科学省調査とも年度間の自殺者数。
※警察庁調査における、令和6年1月～3月までの数値は暫定値である。

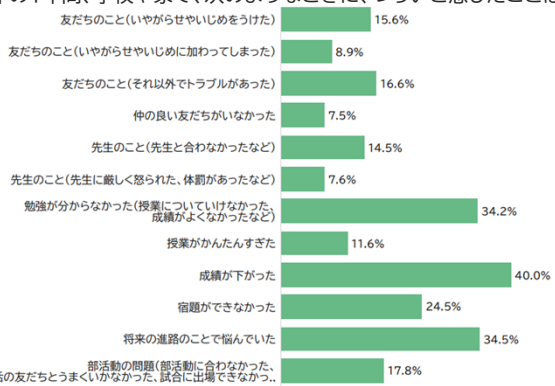
© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します

5

令和5年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果より

令和4年度に辛いと感じたこと（参考：小中高校生約25,000人の回答から）

あなたは前の学年の1年間、学校や家で、次のようなときに、つらいと感じたことはありましたか。



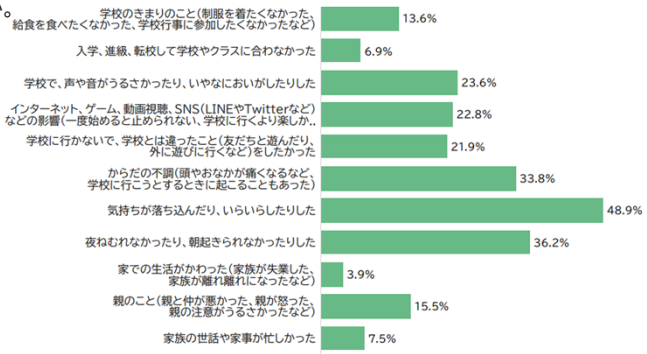
© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します

6

令和5年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果より

令和4年度に辛いと感じたこと（参考：小中高校生約25,000人の回答から）

あなたは前の学年の1年間、学校や家で、次のようなときに、つらいと感じたことはありましたか。



© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します

7

ACE研究とは

研究が語る、子ども時代が成人期に与える影響の大きさ

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します

8

無断転載、複製、配布を禁ずる。

ACE研究とは

皆さんの経験を振り返って

1. 両親や大人の家族がよくあなたを罵ったり、侮辱したり、悪口を言ったり、
   恥をかかせたりしましたか？もしくは、ケガさせられるんじゃないかと
   恐れるような振る舞いがよくありましたか？
2. 両親や他の大人の家族がよくあなたを押したり、つかんだり、平手打ちしたり、
   ものを投げたりしましたか？もしくは、あざになったりけがをするほど叩きましたか？
3. 大人かあなたより5歳以上の人が、性的なやり方で、あなたのからだに触ったり、
   抱きしめたり、自分の身体を触らせたりしたことはありますか？
   もしくは、口や肛門や膣に性器を挿入しようとしたことはありますか？
4. あなたは、家族の誰からも愛されていない、自分が重要や特別に思われていないと感じることが
   よくありましたか？もしくは、家族は互いに、気づかったり、親しく感じたり、
   支え合ったりしていない、とよく感じましたか？
5. あなたは、十分に食べていない、汚い服を着せられている、誰も守ってくれない、と
   よく感じていましたか？もしくは、親がアルコールや薬で酔っ払っていて
   世話をしてくれなかったり、医者に連れて行ってくれないとよく感じましたか？

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します 9

9

ACE研究とは

皆さんの経験を振り返って　続き

6. 両親が離婚や別居をしましたか？
7. あなたの母親や継母がよく、突かれたり、つかまれたり、叩かれたり、
   ものを投げられたりしていましたか？もしくは、ときどきまたはよく、蹴られたり、
   噛まれたり、拳で殴られたり、硬いもので叩かれたりしていましたか？
   もしくは、数分以上殴られ続けたり、刃物や銃で脅されたりしていましたか？
8. あなたは、大酒飲み、アルコールや薬物依存の人と一緒に住んでいましたか？
9. あなたの家族の誰かがうつやメンタルを病んでいましたか？
   もしくは、自殺未遂をしましたか？
10. あなたの家族の誰かが刑務所に入りましたか？

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します 10

10

ACE研究とは

ACEとは？

Adverse Childhood Experiences(逆境的小児期体験)を
言います。

- ここまでの10の質問が代表的なもので、そこには、10のタイプの子ども時代に
  経験するかもしれないトラウマが入っています。そのうち、5つは個人的なもので、
  5つは家族がかかわるものです。
- もちろん、それ以外にも様々なタイプのトラウマ(人種差別、いじめ被害、
  兄弟の虐待の目撃、事故、災害、貧困･･･)がありますが、ACEの10は、
  そうしたトラウマ体験の中から、よくありそうなものを選択したというわけです。
- つまり、ACEの10項目は一つのガイドラインであり、もしもそれ以外の
  トラウマ体験があったとしたら、それはその人のリスクを上げることを意味します。

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します 11

11

ACE研究とは

代表的な研究

The CDC-Kaiser Permanent Adverse Childhood
Experience Study(1995-1997)

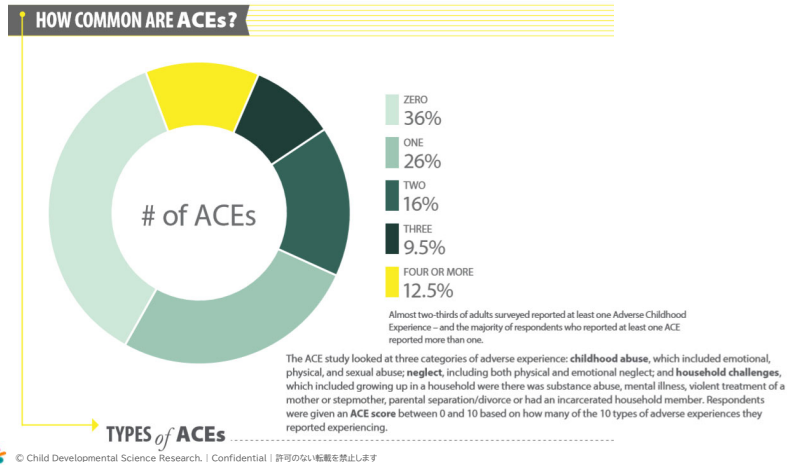
最初の研究結果が1998年に出版されて以降、2015年で、
既に70以上の研究がなされていて、
様々な知見が明らかにされている。

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します 12

12

無断転載、複製、配布を禁ずる。

ACE研究とは



© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します 13

13

ACE研究とは

これまでのACE研究からわかった6つの事実

1. ACEは、良くあること である。
   アメリカ人の3分の2の大人が、少なくとも1つのACEを持っている。
2. ACEは、慢性的な疾患、がん、心臓病、メンタルヘルスの悪化、暴力の被害や加害 を引き起こす。
3. ACEは1つだけを持つことは難しい。
   1つある人の87%が2つか、それ以上を持っている。
4. ACEが、よくある慢性疾患、精神疾患、経済的及び社会的問題と関連があるため、仕事への取組、ヘルスケア、司法、緊急対応の公費支出に影響を及ぼす。

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します 14

14

ACE研究とは

これまでのACE研究からわかった6つの事実

5. ACEによるリスクは、ACEの種類がどれか（10のうちの）、そのACEがどの程度の頻度で起こったのかには関係がない。
   どのACEであっても、それが4点以上であれば、それが何であれ、0点の人に比べ、4倍、喫煙リスクが高まり、7倍、アルコール依存のリスクが高まる。
   また、肺気腫や慢性気管支炎のリスクを4倍、自殺企図のリスクを7倍上げる。
   ACEの点数が高ければ、骨折、薬物依存、うつ病、自己免疫疾患のリスクを上げ、6点以上になると、20年寿命が短くなる可能性がある。
6. 群レベルで考えると、ACEのどれかは関係なく、4つ以上あると、深刻な結果を引き起こす。脳の傷付きは、何が原因かに関係ない。
   全ての傷つき体験は同じインパクトを与える。

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します 15

15

ACE研究とは

ACE概念を広げる

- ACE10項目は、家庭内での虐待、家庭の機能不全に限られていた。
- だが、小児期の傷つき体験はそれだけにとどまらない。
- ACE概念を広げる必要があるのではないか？

例えば・・・
地域での暴力、友だちからのいじめ被害、差別、貧困
里親に育てられること、移民、震災（戦争）等の被害・・・・

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します 16

16

無断転載、複製、配布を禁ずる。

学校の問題に切り込む

学校ACE®研究

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します 17

17

学校ACE®

- 学校は本来、子どもにとって安心安全であり、
  子どもの発達を促し、将来の幸せにつながるもの。
- しかし、昨今の「いじめ認知件数の増大」「不登校の増加」を考えると、
  そういう場でなくなっているかもしれない。
- 学校の問題は、これまでも指摘されているが、明確なエビデンスを提供することにより、これまでのやり方が大きく変わるのではないか。
- 〝引きこもり〟は十分に研究されていない。〝引きこもり〟とACE、学校ACE®の関連を明らかにすることにより、引きこもりの周辺にある、〝ネット依存〟、〝不登校〟についても同様に考えられるかもしれない。元々、〝引きこもり〟は社会適応の問題であり、今の若者が抱える最重要課題の一つ。

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します 18

18

研究のデザイン

- 20歳～34歳の成人4000人を対象に
  Web調査を実施。
- 質問内容は以下の通り
  基本情報：性別、学歴、家族の人数、年収
  現在の状況：引きこもり（外出状況、仕事）、メンタルヘルス（PHQ-4）
  過去のこと（18歳以前）：ACE、学校ACE®

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します 19

19

結果

	Total n=3999
ACE 合計：平均（標準偏差）	0.76(1.37)
精神的虐待(%)	503(12.6)
身体的虐待(%)	390(9.8)
性的虐待(%)	162(4.1)
心理的ネグレクト(%)	460(11.5)
ネグレクト(%)	94(2.4)
離婚・別居(%)	716(17.9)
DV目撃(%)	210(5.3)
家族の依存症(%)	177(4.4)
家族の精神疾患(%)	298(7.5)
家族の収監(%)	34(0.9)
ACE 1点以上(%)	**1436(35.9)**
ACE 4点以上(%)	244(6.1)

	Total n=3999
学校ACE合計：平均（標準偏差）	0.96(1.18)
教師関連スコア：平均（標準偏差）	0.32(0.75)
いじめ関連スコア：平均（標準偏差）	0.64(0.71)
教師精神的虐待(%)	297(7.4)
教師身体的虐待(%)	149(3.7)
教師性的虐待(%)	51(1.3)
教師精神的ネグレクト(%)	577(14.4)
友だちへの暴力目撃(%)	208(5.2)
クラスメイトからのいじめ(%)	1924(48.1)
先輩からのいじめ(%)	632(15.8)
学校ACE® 1点以上(%)	**2202(55.1)**
PHQ-4：平均（標準偏差）	2.65(3.16)
抑うつ不安 中程度以上	653(16.3)
引きこもり(%)	138(3.5)

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します 20

20

無断転載、複製、配布を禁ずる。

学校ACE®研究

結果

- ACE1点以上が35.9%だったのに対し、学校ACE®1点以上は55.1%。つまり、**日本人は家庭内での傷つき体験よりも、学校での傷つき体験を持っている人の方が多い**ことがわかった。
- これまでの先行研究から、日本人でACE1点以上の人の割合は、30～40%であり、合致している。
- 引きこもりは、3.5%。内閣府(令和5年3月)の調査では2.05%と今回の結果の方が多い。しかし、令和3年度に江戸川区で行われた調査結果の4.39%よりは少ない状況で、おそらく現状を正しく示していると考えられる。

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します 21

21

学校ACE®研究

結果

- 引きこもり状態の人の約半数に中程度以上の抑うつ・不安があった。
- 学校ACE®が1点以上の人のうち、中等度以上の抑うつ・不安症状がある人は22.8%(学校ACE®が0点の人では8.4%)。また、学校ACE®が1点以上の人のうち、引きこもりの人は4.8%(学校ACE®が0点の人では1.8%)。
- ACE(従来型)1点以上の人のうち、中等度以上の抑うつ・不安症状がある人は27.3%(ACEが0点の人では10.2%)。また、ACEが1点以上の人のうち、引きこもりの人は5.4%(ACEが0点の人では2.4%)。

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します 22

22

学校ACE®研究

ACE、学校ACE®とメンタルヘルス

	モデル1OR(95%CI)	モデル2OR(95%CI)
ACE合計	**1.24(1.17,1.32)***	**1.25(1.17,1.33)***
学校ACE®合計	**1.44(1.38,1.55)***	
学校ACE®(教師関連)		**1.33(1.19,1.49)***
学校ACE®(いじめ関連)		**1.60(1.40,1.83)***
性別(女性)	1.07(0.89,1.29)	1.07(0.89,1.29)
年齢	0.97(0.95,0.99)*	0.97(0.95,0.99)*
学歴	0.94(0.88,1.01)	0.94(0.88,1.01)
生活環境	0.68(0.64,0.73)*	0.68(0.64,0.73)*
家族の人数	1.03(0.96,1.10)	1.03(0.96,1.10)

- モデル1は、学校ACE®を全体で扱い、モデル2は、教師関連といじめ関連に分けている。
- ACE、学校ACE®の両方が、メンタルヘルスと相関があった。
- 年齢が高いこと、良好な生活環境は、メンタルヘルスと逆相関があった。
- ACEが1点増えると、メンタルヘルスリスクが24%増加。
- 学校ACE®が1点増えると、メンタルヘルスリルクは44%増加(教師関連は1点につき33%、いじめ関連は1点につき60%)。

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します 23

23

学校ACE®研究

ACE、学校ACE®と引きこもり

	モデル1OR(95%CI)	モデル2OR(95%CI)
ACE合計	1.01(0.89,1.13)	1.01(0.90,1.14)
学校ACE®合計	**1.29(1.13,1.47)***	
学校ACE®(教師関連)		**1.23(1.01,1.51)***
学校ACE®(いじめ関連)		**1.37(1.06,1.78)***
性別(女性)	0.84(0.58,1.21)	0.83(0.58,1.21)
年齢	0.99(0.95,1.03)	0.99(0.95,1.03)
学歴	0.65(0.57,0.74)	0.65(0.57,0.74)
生活環境	0.65(0.58,0.74)	0.65(0.58,0.74)
家族の人数	1.14(1.01,1.30)*	1.14(1.01,1.29)*

- モデル1は、学校ACE®を全体で扱い、モデル2は、教師関連といじめ関連に分けている。
- **学校ACE®だけが引きこもりと相関していた(ACEは関連がなかった)。**
- 家族の人数が多いことは、引きこもりリスクを高めていた。
- 学校ACE®が1点増えると、引きこもりリスクは29%増加(教師関連は1点につき23%、いじめ関連は1点につき37%)。

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します 24

24

無断転載、複製、配布を禁ずる。

学校ACE®研究

学校ACE®についての考察

- 引きこもりには、学校ACE®だけが影響を与えていた。
- 考えてみれば、引きこもりは、家庭が安全でなければできないこと。
- 学校は社会との最初の接点。
  そこでの傷つき体験は、社会参加に大きな影響を与えている可能性がある。
- 学校ACE®は、引きこもりだけでなく、
  他のことにも影響を与えている可能性がある。
- これまで小児期の傷つき体験といえば、虐待が注目されてきた。
  もちろん虐待の防止は非常に重要だが、同時に学校での傷つき体験、
  いじめ被害、教師加害による傷つきについての防止をする必要がある。

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します 25

25

学校ACE®研究

Front. Public Health, 26 October 2023 Sec. Public Mental Health
Volume 11 - 2023 | https://doi.org/10.3389/fpubh.2023.1277766

Adverse childhood experiences: impacts on adult mental health and social withdrawal

Manabu Wakuta, Tomoko Nishimura, Yuko Osuka, Nobuaki Tsukui, Michio Takahashi,
Masaki Adachi, Toshiaki Suwa, Taiichi Katayama

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します 26

26

ではどうすればいいのか？

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します 27

27

ではどうすればいいのか？

Trauma Informed Schools
Trauma Sensitive Schools

- トラウマのある子どもへの対応を間違えると、
  その子どもの将来の幸せまでつぶしてしまう。
- その社会的影響は大きい。
  (犯罪、引きこもり、依存、精神疾患、自殺、慢性疾患、次の世代の問題･･･)
- そういうことから、Trauma Informed Schools(トラウマに配慮した学校)Trauma Sensitive Schools(トラウマについて敏感に考える学校)という概念ができあがった。
- トラウマのある子どもを特定し支援しようというのではなく、
  すべての子どもがトラウマがある可能性があるという前提で、
  すべての大人が正しい知識を得て指導支援をしていこうという学校である。

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します 28

28

無断転載、複製、配布を禁ずる。

ではどうすればいいのか？

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します 29

29

ではどうすればいいのか？

児童生徒にトラウマがあることを前提にする

- 子どもの感情反応(怒り、不安、悲しみ)には、過去のトラウマが影響しているかもしれない。
- 感情に感情で対応するのは、間違っている。
- 教師他、学校スタッフの全員が、トラウマ、トラウマの影響、思春期のメンタルヘルスについての知識を持ち、正しい対応を行う。
- 何よりも、「児童生徒の安心安全」が確保された学校環境にする。

いじめ予防、大人による人権侵害をなくす

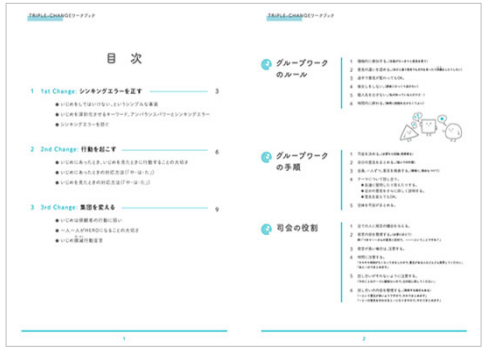
© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します 30

30

ではどうすればいいのか？

いじめ予防プログラム・トリプルチェンジ

- 子どもの発達科学研究所では、いじめ予防プログラム、トリプルチェンジを現場に提供している。
- これは、年間3時間(考え方を変える、行動を変える、学校風土を変える)の授業を行うことを中心としたプログラム。
- 担任が自らの教室のいじめ対策に責任を持つ。
- ワークブック、教材動画、研修トレーニングのセット。

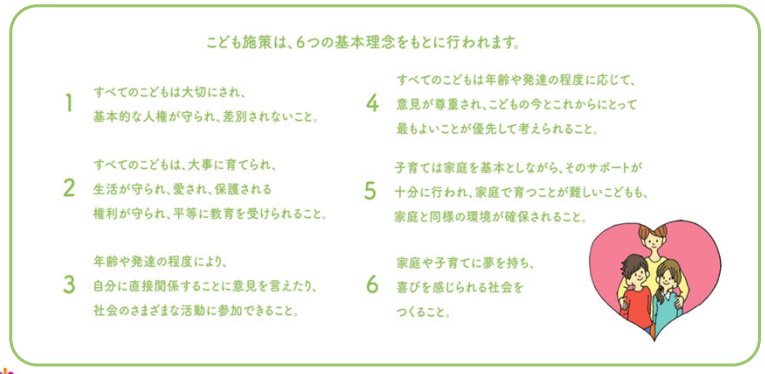


© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します 31

31

ではどうすればいいのか？

こども基本法 こども家庭庁HPより



© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します 32

32

無断転載、複製、配布を禁ずる。

ではどうすればいいのか？

子どもの権利を守る

- □ 子どもだからと言って差別していないか？
  （大人にはしないような扱いをしていないか）
- □ 指導という名の下に、子どもが嫌がることを強制していないか？
- □ 失敗すると分かっていることをやらせていないか？
- □ 子どもの意見を聞いているか？
- □ 子どもに選択肢を与えているか？
- □ 子どもが困ったとき、助けてほしいときに、確実に援助される状態にあるか？（困っていると言えない状況になっていないか？）
- □ 子どもが失敗しても許されると安心できているか？

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します 33

33

ではどうすればいいのか？

教師・保護者にもトラウマがあるかもしれない

- メンタルヘルスの悪化、情緒の不安定さ
- 突然の怒り、感情に対しての感情反応
- 自分ではコントロールできない行動
- 過度の緊張、不眠、敏感さ
- 突然、人が変わったようになる
- 自己肯定感の低さ、他者の評価を信じられない　など

その行動、反応の原因はトラウマにあると知っていると、本人も、周りも、適切な理解、対処が可能になる。

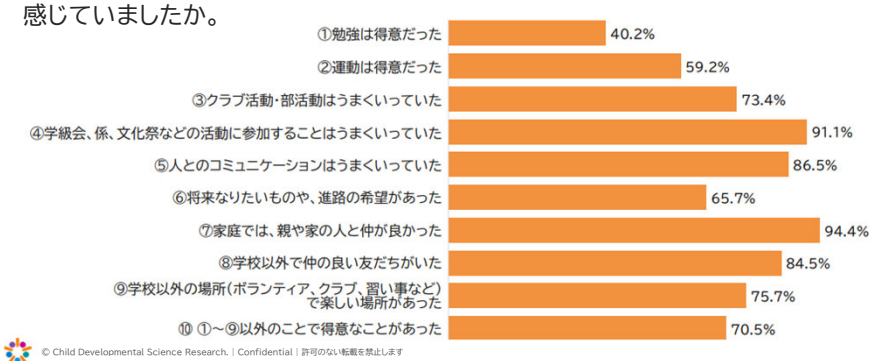
© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します 34

34

ではどうすればいいのか？

令和4年度の得意なことについて

あなたは前の学年の1年間で、以下について、自分のことをどのように感じていましたか。



© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します 35

35

ではどうすればいいのか？

令和4年度の楽しかったことについて

あなたは前の学年の1年間で、学校生活の次のようなときに、楽しい、うれしいと感じたことはありましたか。

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します 36

36

無断転載、複製、配布を禁ずる。

まとめ

まとめ

- 時代は変化した。昔の学校では許されたこと(むしろ推奨されたこと)が、今は問題ありとされていることは少なくない。
- どのような理由があっても、子どもを傷つけてはいけない。
- 教師が、「多様性を認める」「相手を尊重する」「言葉による問題解決を行う」ことのモデルを提供する必要がある。(教師の非認知スキルが試される)
- 子どもも大人も、誰もがトラウマを持っている可能性がある。ACE研究で分かったことを現場に活かさなければならない。
- 全ての子どもたちの幸せな未来の実現のために、頑張りましょう。

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します 37

37

公益社団法人
子どもの発達科学研究所

38